# 文学者としての従軍報告
## ――岸田國士『北支物情』・『従軍五十日』から――

中　川　拓　哉

### はじめに

1937年11月、宮本百合子はこの年顕著になった文学的現象として、作家が戦争ルポルタージュを書き始めたことを挙げている[1)]。この年の７月７日、盧溝橋での日中両軍の衝突を端緒として中国全土にわたっての「事変」が始まった。その一月後には早くも吉川英治をはじめとして著名な作家達が特派員として相次いで大陸へ渡り、戦争ルポルタージュを新聞や各種雑誌に発表していた。

宮本が指摘するのは、文芸活動に従事していた職業作家までもが戦争ルポルタージュを扱おうとする傾向である。ジャーナリストに任せず作家たちが自ら戦争を報告しようとする動機はどこにあるのか、宮本はその背景に、戦争以前から作家・文学者たちの間で論じられてきた「作家の社会性の拡大への要求、大人の文学への要求、国民の文学と称せられるものへの要求」があると見る[2)]。盧溝橋事件以前に宮本が言う「作家の社会性」への要求はいかに論じられ、戦時下で作家達がすすんで戦争ルポルタージュへ取り組む背景をいかに成したのか、そしてその目論見はいかなる形で結実したのか。本稿の関心は、文学者の社会的役割の充足という観点から戦争前後の文学をめぐる言説の連続性を明らかにすることにある。

社会的役割としての「作家」・「文学者」が体制・メディアによる演出のもとで大きな注目を集めた日中戦争最初の事例が、1938年９月に中国へ派遣された通称「従軍ペン部隊」である。従軍ペン部隊に関しては、参加した個々の作家に焦点を当てた先行研究が蓄積されているほか、近年では五味渕典嗣（2018）が「従軍ペン部隊」を「思想戦」構想の中に位置づけ軍部・文学者双方からの目論見を論じ、松本和也（2018a）は同時代的な文学をめぐる活動・現象の総体として「場」をコンセプトに戦争文学を考察している[3)]。

本稿はとくに岸田國士（1890–1954）に着目する。軍人の家に生まれた岸田は1920年から23年までパリに留学、帰国後は自作戯曲や翻訳を発表し新劇の改革に意欲的に取り組んだ。戦時下では従軍ペン部隊に参加し、1940年の大政翼賛会結成にあたっては初代文化部部長に就任、総動員体制下で文学方面の責任者となった。しかし1942年、東条英機内閣のもとで翼賛体制が改組された際に辞任し、終戦を迎えることとなる。

日中戦争下で発表された岸田の二つのルポルタージュ、『北支物情』（1938）と『従軍五十

日』（1939）について、先行研究は同時期の他の文学者達の戦争ルポルタージュと比べ、異質さを指摘している。渡邊一民（1982）は、『従軍五十日』から「きわめて抑制された筆致でつづられた穏当な日中戦争批判」を読み取っている[4)]。荒井とみ子（2007）は、岸田のルポルタージュの特徴は「韜晦もごまかしもないところ」にあり、描き出された岸田の「眼前の戦況に対する率直な不安」、「目を背けたい困惑」に「戦場に最後まで適応できなかった痛ましさ」を感じている[5)]。松本和也（2015）は、日本側の大義名分論を客観的に検討しつつも、同時に戦争を意義付ける修辞を駆使して戦争批判には至らない岸田の姿勢の「バランス感覚」を指摘する[6)]。

本稿ではこれらの先行研究を参照しつつ、盧溝橋事件以前における国家と文学の関係に関する岸田の論説を、戦時下における文学的実践としての従軍報告に併置させることで、文学者の社会的役割の充足という観点から文学者たちの戦争参加を分析する。先行研究が指摘する岸田のルポルタージュの異質さは同時代にも認識されており、かつ高く評価されていた。岸田のルポルタージュは、「文学者」としての戦争ルポルタージュへの期待といかに呼応していたのか。この点を検討することで、「挙国一致」の中に「作家」・「文学者」の存在意義を見いだそうとした文学と戦争をめぐる当時の言説の一端を明らかにする。

## 1．ポスト・マルキシズムの時代：文学と大衆

河合栄治郎は1933年に発表した「自由主義の再検討」と題した論文で、「近頃の日本の思想界に著しき傾向は、国家主義の圧倒的優勢とマルキシズムの凋落と、自由主義の台頭とである」と書いた[7)]。1930年代に入りマルクス主義思想が度重なる弾圧のもと退潮すると、かわって国家主義・日本主義と言われる保守主義的傾向と、同時に自由主義を標榜する一派が台頭する。満州事変以来の「非常時」下で「国家主義」・「日本主義」を掲げる一派は、伝統への回帰を志向し、文学を通じた国家への貢献を図る。『改造』1934年 4 月号の林房雄「政治か文学か？」や『文芸』1934年 9 月号の亀井勝一郎「政治と文学」などに見られるように、第一次世界大戦後にマルクス主義が提起した「政治と文学」の問題はマルクス主義とは逆ベクトルで取り組まれたのだった。

河合が指摘したもう一方の「自由主義」の台頭は文学と密接に結びついていた。1933年から「文芸復興」の語が総合雑誌・文芸雑誌で見られるようになる。この年には『行動』、『文芸』のほか、10月には小林秀雄、林房雄らが中心となって『文学界』が創刊された。1935年版の『改造年鑑』は「文芸復興」を「第一に、文芸が他のもの、特に政治からの抑圧を脱して、その独立性を取り戻したといふ意味」として、「文学のための文学といふことが認められてきた」と説明する[8)]。文芸復興とそれを支える自由主義は、反ファシズム的立場の表明であると同時にマルクス主義からの「自由」であり、政治的なものとの決別を打ち出していた。マ

ルクス主義の立場からは、たとえば戸坂潤が「文学のための文学」を標榜する自由主義的作家を「文学主義」と批判したが、これに対し小林秀雄は、文学者はマルクス主義がもたらした「文壇的専門化と思想的公式化」によって貧しくなった「健全な常識」を取り戻そうとしているとして、教条主義による創作活動の狭隘化の弊害を指摘した[9)]。

小林はまた1937年４月の「「日本的なもの」の問題」で、マルクス主義思想流入後の術語の氾濫、教条的命題、論壇のセクト化による文学の「専門化」が、一般読者を文学から遠ざけたと論じる。大衆と文学の関係は、「政治と文学」の問題とともに各文芸雑誌で主たる論題となっていた。当時の文学は作品の質、それは同時に読者の質の差として、「純文学」と「大衆文学」あるいは「娯楽文学」、「通俗文学」と言われるものに二分されていた。1934年版『毎日年鑑』によれば、「純文学小説」が「高級雑誌文学雑誌」に発表される一方で、「婦人雑誌、大衆小説雑誌、新聞紙」が、「一般に通俗小説と呼ばれる現代恋愛小説」を引受け、「二つの流れが平行線を作ってゐる」状況があった[10)]。書き手、読者、媒体の各面において両者には確かな隔たりがあった。

大衆文学が台頭する一方で芸術性を志向する「純文学」は、1930年代に経済的に困難な状況にあった。1933年版の『朝日年鑑』は、「通俗大衆的の作品は相変らず益々需要が旺んであるのに対して、純文芸の作品は愈々その需要が狭められつつあり、文士の貧窮生活救済をさへ叫ぶ一部の作家が純文芸方面にはある程であつた」とこの年の文学界の状況について書く[11)]。板垣直子は、1931年から1933年が「最近文芸思潮の衰退期の中で最もどん底の時代」だったという[12)]。「文芸復興」の語を世に広めるきっかけとなった川端康成は、1933年に「純文学の精神」と題する「純文学激励の辞」を書いている[13)]。「文芸復興」のかけ声の裏で純文芸の需要の低下は顕著になっており、「純文学」は「通俗文学」を文学的にも、そして経済的にも無視できなくなっていた。

このような状況下で「文学」と「大衆」を調和させようとした試みがみられた。例えば1935年に横光利一が発表した「純粋小説論」は、「純文学にして通俗小説」、「通俗小説と純文学とを一つにしたもの」を「純粋小説」と呼び、今後の小説のいくべき道であると主張した[14)]。1936年版の『改造年鑑』は、純文学作家たちから、従来純文学の敵として排撃されるものであった通俗文学を純文学と「なにらかの形において結びつけようとする考へ」が提起され始めた理由として、作家としての生活の困窮とともに、「文学をより広い民衆にはたらき掛けるものとしようとする社会的関心」の目覚めを挙げている[15)]。言論統制と経済的苦境の狭間で、大衆の存在は「文学」の社会的役割と地位を表明するために重要となっていた。

劇作家として新劇の革新に努めてきた岸田もまた、1930年ごろから小説を通じ「大衆」へ働きかけ始めた。1929年９月から『朝日新聞』で小説『由利旗江』を連載して以降、岸田は小説を継続的に発表するとともに戯曲の創作を減らしていった[16)]。岸田は戯曲の場合と異なり小説の発表の場は新聞や娯楽雑誌に限定した[17)]。岸田にとっても、小説は大衆にアプローチす

るためのメディアであった。

河上徹太郎は岸田を、「現代といふ時代に於ける文化人の生き方」を探求する「モラリスト」として論じる[18]。岸田は最初の小説『由利旗江』では妻として家庭に入ることを拒み働き続ける女性を、『愛翼千里』ではドイツ人の夫を持つ女性が日本の社会から排除され死に至る顛末を描き、現代日本の社会が抱える問題を提起した。渡邊が評するように1930年代の岸田は、戯曲に対する芸術的革新者であると同時に、「日本人および日本の社会の歪みを剔抉する啓蒙的社会小説」を発表する通俗作家としての二つの顔を備えていた[19]。

## 2．国家による文学者への働きかけ

国家による文学者への働きかけは、すでに従軍ペン部隊以前から行われていた。言論統制という消極的干渉とともに、文学の社会的認識を高めようとする積極的施策が1930年代から目立ってくる。

1934年には斎藤内閣警保局長の松本学が直木三十五と組み「文芸懇話会」を創設した。文芸懇話会には大衆作家・純文学作家双方から参加者があり、かねてより演劇アカデミー設立を訴えていた岸田國士も出席した。片岡貢によれば、松本が文学の国策宣伝への利用をもくろむ一方で、ファッショ作家を自称した直木は大衆文学の国粋化を目標としていた[20]。ファッショ化への反発や国家による統制の懸念から、純文学者の反対もあり、また賞金や表彰をめぐるいざこざもあって文芸懇話会は直木の死後に団体としての活動を停止し、松本が推進していた文学アカデミー「帝国文芸院」構想も頓挫した。

1935年11月には外務省の斡旋で国際ペンクラブ日本支部が設立された。初代会長は島崎藤村、副会長は有島生馬、堀口大学である。設立の狙いは日本文学の国際進出にあり、国際文学賞の制定や作品の翻訳事業がはかられた。『改造年鑑』は1935年の日本文学を巡る動向について「とにかく今年は政府ないし政府筋の対文化的働きかけが非常に多かった」と記している[21]。

1937年の 2 月11日紀元節には林銑十郎内閣が「文化ノ發達ニ關シ勲績卓絶ナル者」に授与される文化勲章令を制定、即日公布施行した。文学者としては幸田露伴と佐佐木信綱が選出された。内務省警保局図書課の『出版警察資料』は、作家らが概ね勲章の制定を歓迎していると報告する[22]。この報告では、文学者達が文化勲章制定に好感をもっている理由に文学者たちの期待を挙げている。文化勲章の制定は「一般に国家に対する武の貢献に対して、文の貢献が初めて認められた」と捉えることができ、「文化に携はるものの地位」に対して、そして「文化に対する民衆の理解」に対して好影響を与えることが期待されていた[23]。「ペン部隊」以前から、国家の権威を通じて作家の社会的地位を知らしめること、国家による承認を背景とした民衆的価値観への働きかけは、文学者たちから少なくない賛同を得ていたのだった。

岸田は「文化勲章」に対して慎重な姿勢を見せている。今まで、「他の部門はいざ知らず、文芸の領域だけを見ると、殆んどなんらのインテレストを示してゐなかつた」政治家たちが「文化発達に関して勲績卓絶なるもの」を選ぶことができるのか、岸田は疑問視する[24)]。また岸田は、「文学者が一国の文化に貢献するといふ意味」の複雑微妙さについても語る。文学の場合、「往々官憲の忌諱に触れたやうな作品」がむしろ後代に「国民全体の矜り」となるものは珍しくないため、「直接、国家へのサーヴイスの程度で、その仕事の「文化的価値」を判断するのは間違ひ」である[25)]。また文化勲章が伝統的とされる文化を称揚し、西洋に由来する文化・思想を「一概に非民族的なものとして軽視」しないかとの懸念もある。パリで演劇理論を学び、「新劇」の革新を目指してきた岸田にとって、「伝統」の名のもとに排外主義を正当化することは容認できなかった。

盧溝橋事件から 1 年ほど前の1936年に岸田は、「文学者と愛国心」をテーマとした『文学界』リレー評論企画で「日本に生まれた以上は」を書いている。ここから国家と文学の関係についての岸田の姿勢を見て取ることが出来る。

岸田は、「文学者的」に「愛国心」という語を取り扱う用意ができていないと前置きしつつ、自身が考える愛国的な在り方について述べる[26)]。岸田は「日本は世界の他の国に比べて優れてゐる」から日本を愛するという見解は危険であり、また日本の改善を図るにせよ、「その「善く」といふ観念」は飽くまで世界共通に目指されるものでなくてはならず、「独善的」になってはならないという[27)]。また「愛国者」たるために「愛国的行動」を強制することに岸田は異議を唱え、文学者として「愛国文学」を提唱する必要を認めない[28)]。岸田は、各人に自律した思索者であることを求め、たえず他者（他国）を参照し、対比的に自身（日本）の在り方を批評する。

岸田自身にとってこの姿勢は「健全なる社会感覚」、「常識」と言うべきものであった[29)]。しかし岸田は、さらなる大前提として、いざ戦争になったならば他国に征服されることは文化の終焉であり、「敵に正義の名を奪はれても、戦争には負けてはならぬ」という[30)]。戦時において国家のすべてを肯定し協力することは、「止むに止まれぬ愛国的行為」である[31)]。岸田にとって「健全なる社会感覚」はあくまで平時のものであった。そして「日本に生まれた以上は」から一年も経たずに盧溝橋事件が勃発し、実際に岸田は文学者としての「愛国的行為」を実践する立場に置かれることとなった。

## 3．戦争ルポルタージュの問題

1937年 7 月 7 日、盧溝橋にて日中両軍が衝突した。11日に日本政府は「今次事件は全く支那側の計画的武力抗日なること最早疑の余地なし」として派兵を決定した。同日の出兵声明に際し、内閣書記官長風見章の提案で政府は新聞通信社代表40名を首相官邸に招へいし事態へ

の協力を求めた。近衛文麿首相の「挙国一致政府の方針に協力され度い」との要望に対し、新聞・通信社側は同盟通信社の岩永裕吉社長が代表して「挙国一致政府の方針遂行に協力すべき旨」を述べた[32]。続く13日には中央公論・改造社・日本評論社・文藝春秋社の四代総合雑誌出版社社長を招致し、政府は同様に挙国体制確立のための協力を要請した。7月13日に内務省は「時局ニ関スル記事取扱方ニ関スル件」を通達し、反戦的な言論、日本の侵略主義を疑わせるもの、日本を誹謗する外国記事を差し止めの対象とした。1939年版『時事年鑑』によると、1937年度の発売禁止件数が前年度より200件減少した一方で、差し押さえ部数は25万部増加の150万部と「レコード」を記録した[33]。その理由としては「当局が時局に鑑み早期発見に主力を注ぎ管下各署と密接な連絡の下に敏捷な活躍を行つたため」と書かれている[34]。

8月に入ると上海で日中両軍が交戦、15日に近衛首相は「支那暴戻を膺懲す」との声明を発表し戦線は大陸全土へ拡大した。日本政府は交戦国への武器輸出を禁じるアメリカの中立法適用を回避するため宣戦布告を行わないこととし、9月2日以降、戦争は「支那事変」と呼ばれる。8月24日には、近衛内閣が国民精神総動員運動実施要綱を閣議決定し、10月より「挙国一致」「尽忠報国」をモットーとするキャンペーンが展開された。12月には戦争批判を理由に東京帝国大学の矢内原忠雄が辞任に追い込まれ、戸坂潤、宮本百合子らマルクス主義文学者7人が文筆活動の停止を強いられた。こうしてマス・メディアを動員する「挙国一致」の言説空間は急速に整えられた。

「挙国一致」のスローガンのもと、ジャーナリズムの活発な動きは1931年の満州事変と比べて圧倒的であった。盧溝橋事件から一月ほどのちには作家の派遣が始まっている。東京日日新聞は吉川英治を特派員として天津へ、続いて木村毅を上海に派遣した。その後は、雑誌が戦争初期の文学的ルポルタージュの中心となった。8月のうちに『主婦の友』が吉屋信子を天津へ、『中央公論』が林房雄、尾崎士郎を華北へ、9月初めに『日本評論』は榊山潤を上海へ派遣した。そして10月には岸田國士が『文藝春秋』から派遣された。総合雑誌・大衆雑誌問わず名のある作家を特派員として起用し、ルポルタージュおよびそれに取材する創作作品を発表させた。出版各社は突然の国民的関心事を商機とみて、著名作家の訴求力に期待したのである。

軍需による好況は文学市場にも影響したが、実際はつかの間のことであった。昭和13年度版『出版年鑑』によれば8，9月には一般単行本の購買力は減退していたという[35]。戦況への関心が専らとなった大衆は新聞、雑誌、ラジオ、ニュース映画へ向かい、事変と関連のない小説、戯曲、随筆などの読み物は目立って不振だった[36]。結果、出版界は「事変」関連書籍に席巻され、1938年7月の『出版警察報』によれば、事変を直接の主題とした「事変もの」が1937年10月には215種、11月には217種、12月には218種出版されるほどとなった[37]。

しかし「事変もの」の文芸作品の出来については、ルポルタージュ含め低い評価がつきまとった。板垣直子の『現代小説論』（1938）は、「各社から特派されたる安つぽい主観のかつ

た作家の現地報告文が大量生産され、ルポルタージュ文学の名と検討を惹起してゐる」と書いた[38]。「現地報告の雑文類の範囲」を出て戦争文学といえるものは出てこず、板垣は「派遣文士の雑記や創作」よりもむしろ新聞記者による「生々しい生気溌剌とした」ルポルタージュにより価値あるものを見いだす[39]。板垣によれば、作家は「特有の癖を有し且つ主観性が強い」ため、ルポルタージュにも「文章、人間、或いは作家としての傾向」がそのまま出ており、ルポルタージュとしての価値を損なう[40]。戦争ルポルタージュのためには、「生きた現実のさ中にゐて、或る絶対的な事実の前に冷厳に身を持し、緊密にして差迫つた主観で最も必要で大切なものに就いてのみ表白する」ことが重要であり、つまりは「目的だけがあつて自己のない状態」がよいと板垣は論じる[41]。

作家の「主観性」がルポルタージュの価値を損なうという評価は、先に引用した宮本百合子の評論でも、作家の「感傷性」として批判の対象になっている。宮本は、「ルポルタージュは観たこと、聴いたこと、感じたこと、即ち対象となる現実をひっくるめた人間生活諸相の報告」であるべきだが、林房雄や尾崎士郎のルポルタージュは「平常では見られない珍らしいこと、スリルなこと、風土的エキゾチシズム」への関心にとらわれていると批判する[42]。ここで宮本は「より客観的に現実を観得る眼力」を作家に要求する[43]。

主観性とともに作家のルポルタージュに対する批判点となったのが、前線への不参加であった。たいていの作家達が到着した頃にはすでに前線は移動しており、彼らが戦闘に加わることはなかった。小林秀雄は1937年11月の「戦争について」で戦争文学における体験の不可欠さについて述べる。小林は「体験による人には明かし難い戦争に関する知識と傍観者の理解の軽薄さとの対照」を指摘し、体験者だけが戦争文学を著しうると言う[44]。佐々木草太郎は、実際に戦地に立っていない作家はどれほどキャリアを積み事変に夢中だろうと、「それを読むものをして実に歯の浮くやうな表現」しかできないと言う[45]。従軍報告は戦争の状況を知りたいという人々の欲望に答えるものであるが、非戦闘員の従軍記者は第一線にたてず、「常に危険の第二線」にいる。ここに従軍報告と戦争文学の「切実さ」の隔たりがあると佐々木は主張する[46]。

板垣直子は、「戦のすぎた跡もしくは「外」を「有閑的」といつていい状態で歩いてゐる」ことも作家達のルポルタージュの欠点として挙げる[47]。この「有閑的」な気分には、「事変」に対する見通しの甘さも影響していた。板垣は対米戦争も始まっていた1943年の著作でこの時期を振り返っているが、この頃のルポルタージュには「比較的のどかな安心していた一面があつた」と回顧している[48]。1937年の段階では日中両軍の衝突が長期化する展望は人々に共有されておらず、物資の統制も国民生活を圧迫するほどではなかった。

板垣や宮本は理想のルポルタージュのために「自己なき主観」による「事実」の報告を要求している。しかしそれは個性的な書き手という文学者としての役割と齟齬があった。また小林や佐々木がテキストに求める戦争体験の「切実さ」には、銃後の読者がテキストを通じ「戦

争」を共同体験したいという欲望がある。この要求のもとでは、作家自身の感慨や、凝った語りの技巧は「生々しさ」を損なうものとしてむしろ批判の対象となった。戦争ルポルタージュに対しては、一方に冷静な客観的視点が要求され、他方で読者が戦争体験をシミュレートできるほど個人的体験に密着したものであることが要求されていた。

## 4．『北支物情』

岸田國士の最初の戦争ルポルタージュ『北支物情』は、岸田が1937年10月に『文藝春秋』から派遣された際の体験をつづったものである。ルートは塘沽―天津―保定―新楽―正定―石家荘―天津―北京そして大連から帰国というものであった。『北支物情』は『文藝春秋』で1937年11月から38年 2 月まで連載され、38年 5 月上梓された[49)]。

岸田は自身が「ジヤアナリストとしての使命」を果たせるか疑問と前置きし、「作家」として戦争を間近に見た印象を綴るつもりだと述べる[50)]。岸田は実際に日本が戦争に突入すると、「日本に生まれた以上は」で述べた姿勢を保持した。『北支物情』の冒頭で岸田は「日本人として」戦争に利することが第一であり、そのためにこの報告が「客観的」たりえないと明言する。さらには「戦さに勝つためには、国民は、ひたすら戦場の光景を美化することに努め、私もまたそれに努力することを任務と考へる」と恣意的な報告になること、歪曲の可能性を隠さない[51)]。わざわざ「客観性」の放棄を明言するということは他のルポルタージュにはないもので、むしろ岸田の客観性への強い関心がここにあらわれている。

戦争には勝たなければならず、それゆえ国民の士気を下げてはならない、しかし戦争の興奮からは距離をとる。岸田はこの姿勢のもといかに戦争を報告したのか。戦争ルポルタージュの客観性には二重のレベルがある。一つは戦争当事者である日中両国に対する客観的観察であり、もう一つの客観性は自らの主観に対する客観的事実である。前節で見たように先行するルポルタージュでは後者がしばしば批判の対象となった。

前者の客観性について、岸田は自覚的に日本に有利になることのみを記述すると明記したのだった。一方で後者の客観性について、岸田の『北支物情』は、同時代に他のルポルタージュと一線を画す物として評価された。近藤東は、岸田の「温暖で健全な眼」が「詩人的感性」と適合して「香高い芸術的雰囲気」を構成し、「他の文学者の如く、戦争への過度の感傷や興奮や概念化」を免れていると評価する[52)]。板垣直子は「初期のみならず、一体にルポルタージュの中で、最も読みごたへのするもの」として岸田のルポルタージュを高く評価する[53)]。岸田は他の作家のように単に破壊された跡や戦況をみることだけにとどまらず、「支那そのものに就いて、より多くの興味を抱き、都市の状態、風俗、習慣、文化的建造物や施設、のみならず、その短い期間の滞在中に知識階級と接触すること」さえ企て、岸田の「文化人」たる一面がよく生きていると板垣は評する[54)]。

俯瞰的に戦争を観察しようとする岸田のまなざしはしかし、前者の客観性つまり現下の「事変」における日本の姿勢に対する批判の可能性を有している。岸田の関心は「日支両国民の共通の希望となるべき将来の文化的工作」にあった[55]。しかし「つかめない文化工作」という章で、岸田は「日本側の主要人物」たちから、「今は戦争の最中だ。非文化的なことをやつとるんだ。毀す一方さ。ハハハ」、「われわれは、戦争の方は引受ける。あとは、誰か出て来てやつてくれるだらう」、「内地で、かれこれ言いすぎるよ。一種の自己満足だ。知識階級にはさういふ傾向が多くていかん」、「大学なんか、ここにはいるまい。奴らにそんな智恵をつけてなににになる」といった無関心な返答に出くわすこととなった[56]。岸田は「みんなが真面目に日本と支那のことを考へてゐてくれるなら、私ごときが、なにも心配することはない」と、この「政治的雰囲気」から逃れ出るしかなく、文化工作についての議論や具体的な展望は最後まで語られないままに終わる[57]。

岸田にとって「軍人」の世界は自身の社会関係の延長線上にある世界であった。岸田は軍人の父を持ち自らも軍人を志して陸軍士官学校に入学した。少尉に任官するが24歳の時に軍籍を離れ、東京大学に入学し劇作家としての道を歩むことになる。『従軍五十日』で、「自分の経験した軍隊生活なるものと、今度の文学者としての従軍とを、まつたく切り離して考える事はできないので、この日の連隊訪問はある意味で戦跡視察の延長のやうなものである」と書いているように、軍隊は岸田にとって神秘性をまとう未知の世界ではなく、同輩たちが過ごす世界であった[58]。

しかし岸田は同時に「文学者」として、軍人としての思考様式に従うことが出来ない。岸田が実感した軍人と文学者との隔たりは「「文弱」について」という章で描かれる。岸田は飛行機の中である将校の殺気立った様子から、軍人たちの思想にしばしばあらわれる「文弱」という言葉を思い起こす。「文弱」とは、端的に言えば「文化的と称する柔弱さ」というものである[59]。軍人達は「平和主義、人道主義、自由主義、等々の流れを汲んだもの」すべてが含まれる「文弱」という語を軍人の「武断的なる精神」に対置する[60]。このような軍人の精神に対して岸田は、「そういうデカダンな傾向をはらむ一切の人間的欲求に同情を持たぬ決意」こそが「今日の重々しい非常時局」を形作っているのであると述べる[61]。この一節は、軍部の武断主義が戦争を導いたという批判を読み取られても仕方のないものである。

出発前に岸田が若い学生達に戦地で何を見たいか質問したところ、ほとんどが「わが軍奮戦の実況」と「日本軍を迎へる支那民衆の表情」を挙げたという。岸田自身にとっても、現地の人々の民衆心理は、文化工作への関心と関連し二つのルポルタージュを通じて岸田の最も重要な観察対象となっている。文化工作とは平和的に民衆を懐柔する方策に他ならず、民衆心理の観察は文化工作の成功の程度を図る尺度となった。

岸田の現地の人々の心理への強い関心を、単純に憐れみや同情と解してはならない。岸田の持論は、日本が“戦後”に大陸を平定し、統治していくためには、民衆心理をないがしろにし

てはならないというものである。『北支物情』では、日本軍の占領のもとで従順に日常を過ごす人々が描かれる。しかし岸田は彼らのうちに「保身の術を心得きつた民衆の、季節的な化粧を見るばかり」であった[62]。岸田にとって重要であるのは、「支那を負かした日本が、将来、如何なる態度で、北支民衆の上にのぞむか」と言うことであり、それが、「彼等を永久の味方にするか敵にするかの分れ目」と考えていた[63]。

帰国した林房雄、岸田國士を交えた1938年 1 月の『文学界』座談会「支那を語る」で、岸田は「戦敗国の民衆の表情に見て取るもの」への共感を求める[64]。岸田は「日本人がどんなに勇敢に戦ひ、正義の旗印をかかげても、ちよつとしたやり方で、支那民衆の感情を踏みにぢるやうなことがないかどうか」をはらはらして見ていたという[65]。例えば保定陥落の旗行列に現地の人々も参加させたことに対し、民衆心理を傷つけるものとして岸田は不安視していた[66]。『北支物情』中ではほかに、当地の知識人との対談が設定された際に、「どんな口実を設けたにせよ、この時局下に、公に支那人を招き、何かを喋らせようといふ浅薄な思ひつき」に感心せずとも乗ってしまったことと悔やんでいる[67]。また当地の文学者と対談した際には「戦捷国民の思ひあがつたひとつの顔」が自分に浮かんでいないかを、岸田は気にかける[68]。『北支物情』の最後は、戦勝気分で酔って騒ぐ日本人客が白人の客に迷惑をかける一景で終えられる。これらの情景からは傲慢な戦勝国としての日本の態度が浮かび上がる。これこそ岸田が最も危惧するものであった。

岸田は中国の民衆が日本に向けるまなざしを最重要視した。それは翻って、日本に対しても相対主義的に臨ませることとなった。「支那を語る」座談会では、熱烈な国家主義者である林房雄と対照されて岸田の姿勢がいっそう露わになる。林は、支那人が「日本人では想像できないほど嘘を」つき、「日本人の十倍」残虐であるという[69]。一方で岸田は「お互に彼等は惨虐だといふことを宣伝し合ふが、一般的な標準で論じることはなかなか困難だ」と返し、相対的観点を手放さない[70]。「簡単な言葉だけれども色々なものの標準が違ふ」という岸田は、日本人にとって奇異に思われることも中国の民衆にとっては自然な事であり、そこに是非を認めない[71]。「日本」を絶対の基準とせず、「支那」と併置して相対的に両者の性格を考えようとする岸田の姿勢は、日本自体をも俯瞰的な視点から批評することになる。およそ 1 年後の『従軍五十日』では、客観的視点からの問いかけがついに「戦争」自体へ及ぶこととなった。

## 5．1938年の転換

12月に日本軍は南京への攻勢を開始し、13日に占領したが「事変」は終結しなかった。近衛内閣は和平条件を厳しいものに設定し、 1 月には「爾後国民政府を対手とせず」の声明発表をもって和平交渉を打ち切る。

1938年になり物資と思想の両面で統制もより厳しいものとなった。紙の統制が開始され雑

誌用紙は 2 割、書籍用紙は 3 割 5 分を制限、紙自体の価格も上昇し出版側は紙質を低下させ対処することとなった[72]。警視庁検閲課は思想関係で要観察となった学者・作家らに対し、発禁処分はもちろん注意にとどめた者に対してもより厳格に記録した。警保局図書課は各種雑誌に国民精神総動員に則った記事・広告掲載を要求した[73]。板垣直子は、この時期のルポルタージュについて、「戦局がすすみ、深入りしてゐたことと同時に国民の心持が時局に対して真剣に腰を据ゑてきたこと、及び、国民の物質生活の上に戦時の物資統制が徐ろに加はつていつたこと」で、ルポルタージュは「有閑的な気分」を失っていったと書く[74]。

1938年は、戦争と文学の関係をめぐる転換点であった。 3 月、石川達三の『生きてゐる兵隊』を掲載した『中央公論』が発売前日に内務省警保局図書課からの通達により発売禁止となる。石川は、『中央公論』編集長雨宮庸蔵、同発行人牧野武夫、同印刷人竹内喜太郎とともに起訴され、 9 月に禁固 4 か月執行猶予 3 年の判決を受けた。先行研究は『生きてゐる兵隊』自体は反戦小説ではなかったと指摘する。五味渕によれば『生きてゐる兵隊』のテキストは決して戦争に抗うものではなく、起訴内容は南京事件などの「皇軍兵士の非戦闘員殺戮、掠奪、軍紀弛緩の状況を記述し、安寧秩序を紊乱した」からであり、中国側が翻訳し日本軍の残虐行為を訴えるプロパガンダに利用したことが問題であった[75]。実際、同時代の「典型的な体制派の批評家」である板垣直子は『生きてゐる兵隊』を賞賛していた[76]。

戦争を扱うテキストの理想とされたのが、1938年 7 月に『改造』で発表された火野葦平の『麦と兵隊』である。『麦と兵隊』は単行本で120万部を売り上げるベストセラーとなった。『麦と兵隊』を評価する人々がしばしば言及するのがその「生々しさ」である。窪川鶴次郎は「火野氏の作品には人間の姿が生々と身近に描かれてゐる」という[77]。文部省社会教育局が1939年に発行した『文部省推薦図書時報』中の『麦と兵隊』および『土と兵隊』の推薦文では、本書の価値の第一は、「著者自身が今度の戦争に参加してゐる戦士であり、砲煙弾雨危急の間、生死の境に闘ひつつ書かれたといふ事実」にある[78]。「見たままを克明に記録」し、「よく地形的実感を与へ、戦争のために死ぬる覚悟を決めた日本兵の心理と奮戦する実相を再現してゐる」と、「実に飾らざる戦ひの記録」としてドキュメント性を評価している[79]。

『麦と兵隊』は文学による戦争体験の範例となった。『従軍五十日』のなかでも、日本軍が中国軍を追撃する状況で岸田が火野に言及する。

> 山腹の目標に中つて炸裂するわが砲弾の威力は物凄く思はれたが、敵の姿はむろん見えず、味方の歩兵も何処をどう動いてゐるのか見分けがつかぬ。ただ部隊本部に通ずる道路上、並にその両側の、人と馬と車の描きだす静動相半ばする風景は、何ものにも譬へ難い息づまるやうな戦線の呼吸を感じさせる。混乱のなかの秩序、休息のなかの緊張、絶望のなかの生命がそこに見出される。身を以てこれを描き得たのが火野葦平氏であらう[80]。

岸田は自身が体験した「戦線の呼吸」、「乱のなかの秩序、休息のなかの緊張、絶望のなかの生命」から火野の作品を想起する。成田龍一は『麦と兵隊』に用いられた読者を引き込む技巧を分析し、『麦と兵隊』を通じて火野の個人的体験としての戦争が、「戦争」として一般化され人々に共有されるプロセスを論じている。成田が「戦争＝戦場における1930年代の思考」という、個々人の体験が一般体験に昇華される読書体験こそ、まさに戦争ルポルタージュに切望されていたものであった[81)]。

1938年 6 月に武昌・漢口・漢陽の三都市いわゆる武漢三鎮の攻略作戦実施が決定されると、8 月に内閣情報部は作家らを招き懇談会を開催、武漢攻略作戦に作家を従軍させることを決定した[82)]。激戦が予想される戦地への派遣は少なからず拒否にあうだろうという菊池寛の予想に反し、作家たちはこぞって従軍を希望した[83)]。最終的に漢口攻略戦へ22名の作家が派遣されることとなり、陸軍班14名、海軍班 8 名の二班に分かれた[84)]。岸田が参加した陸軍班は、9 月22日から28日まで上海、蘇州、杭州で戦跡を視察予定であったが、林と深田がそれぞれ先んじて南京に向かい、他の一行は杭州・蘇州を経て22日に南京へ到着、ここで瀧井・片岡・中谷は大別山方面へ、岸田含め他の者たちは九江行きに分かれそれぞれの部隊に加わった[85)]。岸田はその後、九江を中心として星子、武穴、馬頭、そして、南京、揚州と視察した。

事変 2 年目に突入し、知識人の役割を巡る議論は、「事変」下における知識人の役割を巡る議論へ推移していた。1938年の『出版警察資料』は、「事変を契機として文化機関の国策的動員」が論壇の当面の課題として論議の中心になるとともに、「知識階級批判」が高まっていると報告している[86)]。『文学界』 5 月号は「座談会　知識人の立場」を、『新日本』 5 月号は「知識階級と大衆」、 6 月号「時局は知識人に何を要求するか」を特集、『文芸』 7 月号は「座談会 欧州よりかへりて日本知識人に与ふ」、『新潮』 7 月号は「国策と文学者の役割」をテーマとした[87)]。

国家による思想・言論への介入は、言論統制として現れる一方で、他方国家による文芸活動のバックアップであり、文学の国家における地位向上として受け止められた。上泉秀信は『東京朝日新聞』1938年 8 月29日の「ペン部隊に望む」で「ペン部隊の動員をわたしは文芸家が本格的に国策作戦に踊り出した第一歩と見たい」という。板垣直子は、「文芸上の統制は勿論あつたが、軍当局の方でも、文芸家の力を国策に用ゐやうといふ方針」が新しく起こり、「政治と文芸とが当時いろいろな意味で結付いてきてゐた傾向」とともに、「文芸の社会的地位を強くする一要素でもあつた」と書く[88)]。長年の課題であった文学の地位向上を戦時における国家への貢献を通じて果たしたいという目論見は、ここに「従軍ペン部隊」として一つの達成を見たのだった。

## 6．『従軍五十日』

『従軍五十日』は、「私の従軍報告」という題で朝日新聞に1938年11月 2 日から16日まで掲載され、その後『従軍五十日』として『文藝春秋』で1939年 1 月から 4 月まで発表された。

岸田は「そこここに散在する占領地域の、小部隊を以てする警備と討伐と宣撫工作の実情」だけは腰を落ち着けて見たいという[89]。それにより、「日本軍の如何なる労苦が支那民衆に希望を与へ、その希望が如何なる相でわれわれの理想とするところに近づきつつあるか」の例証を得るためであった[90]。『従軍五十日』でも岸田の関心は当地の人々の心理にあった。岸田は、船上で耳にしたラジオから流れる日本語ニュースを読み上げる中国人とおぼしきアナウンサーの心理に思いをはせる[91]。当地の小学生たちから旗を振って歓迎されると、岸田は「なんだか変な気」がして顔をあげられなかった。歓迎する先生の「美しい意志が、子供たちの口を通じて、なにか無惨な響きを私の心に伝へている」と感じる岸田は、「民族心理の取扱ひの問題として機微に触れてゐる」として、みんなで真面目に考えなければならぬ問題だと提言する[92]。『北支物情』で「みんなが真面目に日本と支那のことを考へてゐてくれるなら、私ごときが、なにも心配することはない」と述べた岸田は、文化工作の悪例をさっそく目の当たりにした[93]。

事変初期のルポルタージュにあった「有閑的な気分」の消失は、『従軍五十日』からも見て取れる。「クリーク」という言葉はいつの間にか「呪はしい響き」を持つようになっていた[94]。岸田は灯火管制のしかれた南京でこれまで目にしたものを振り返り、「そのひとつひとつの生々しさ」が「前後もなく互に重なり合ひ、結びついてできあがつた「今日の戦争」という新しい映像」を思い浮かべる[95]。『従軍五十日』で取り上げられるこうした情景は、『北支物情』中の、日本軍の占領下での平常さが強調された現地の生活描写とは対照的である。

日中戦争は公には「戦争」ではなかった。岸田は「私の従軍報告」の冒頭で「戦略的にも、戦術的にも、これを一般の前例に当てはめることはできない、まったく、風変りな戦」と述べる[96]。『従軍五十日』の「戦争の道義化について」と題する章でも、「こんな戦争といふものは世界歴史はじまつて以来、まつたく前例がない」と「事変」の奇妙さを岸田は指摘する[97]。ここで岸田の「客観性」は、戦争自体への問いかけに至る。

日本側の大義名分に従うならば、現下の「事変」で日本は、「抗日を止めて親日たれ」ということを要求する[98]。すると「支那は、本来望むところのことを、武力的に強いられ、日本も亦、本来、武力をもつて強ふべからざることを、他に手段がないために、止むなくこれによつた」結果ということになる[99]。岸田は中国側の立場から「事変」を解釈してみせる。彼らにとっては「日本のいふ親善とは、自分の方にばかり都合のいいことを指し、支那にとっては、不利乃至屈辱を意味する」のであり、「かかる美名のもとに行はれる日本の侵略を民族の血をもつて防ぎ止めよう」としているにすぎない。「事変」の大義の歪さに、岸田はここで切り込

んでいる。日本軍の文化工作そして中国の人々への観察から岸田は、日中双方の「優越感」が「自尊心」を傷けていたといい、「日本人がもつて矜りとするところと、支那人が秘かに高しとするところは、殆ど比較することさへ困難なやうな性質」を帯びており、「自己を以て他を律する癖」が双方にありすぎる余りに、「不必要な感情的摩擦」が引き起こされていると分析する[100]。中国の民衆心理を顧みず、押しつけがましい「主観的な聖戦論」を唱えるばかりで「戦争の道義化」に拘泥する日本の姿勢についに岸田は疑問を投げかけた。

岸田は戦争の大義を否定することはなく、また泥沼化する「事変」の原因を日中双方の相互理解の問題に求める。両国親善の道を求めつつ、日本の大陸からの撤退、日本抜きの「大陸経営」の可能性は全く扱われない。これは同時代人としての岸田の思考の限界でもあり、同時期の言論空間の前提でもある。しかし日本の大義名分に則るとき、日本側の一方的・独善的な姿勢が露わになる。岸田は国家に利するという前提のもとでこれを批判の対象とした。これは盧溝橋事件前の「日本に生まれたからには」から一貫している。帰国後に書いた「支那人研究」でも主張は保持されており、岸田はここで「日本人」自身への洞察的思考を求める。現在の不都合な結果は「日本人がなんでも自分本位に物を考へ、一事を以て全般を律する癖があるところから来てゐる」のではないかと岸田は問いかける[101]。

岸田は『北支物情』以前から一貫して価値観の相対性を認め、日本側の見解をそのまま道理としない。結果的に岸田は、戦争ルポルタージュでも自身の言う「健全なる社会感覚」を保持し続けた。劇作家である岸田國士のまなざしは、話し手と受け手の相互的なコミュニケーション的観点に基づいている。阿部知二は『北支物情』について、立場の異なる人々にそれぞれの言葉・身振り手振りで語らせている点を「文学的」と評価し、そこに演劇的な手法を見て取っている[102]。各人の立場を併置し相互的に捉える岸田の演劇的な観点は、日本と中国という国家間に対しても適用されていた。

今日出海は、岸田のルポルタージュがジャーナリスティックな要求によらない、「文化人」のルポルタージュとして評価する[103]。『従軍五十日』は岸田の「透徹した理知」に貫かれており、感情的になることはなく、具体的な事象に遭遇するたびに「明徹な解釈と鋭敏な批判」が渦を巻いて出てくる[104]。戦争批判の一歩手前まで行く岸田の文化工作批判に対し、それを問題視する論評は同時代でも見られない。今は「思想も、知的反省もない」迫真的な火野のテキストに岸田のルポルタージュを対置し、「知識人が知識人の資格に於て従軍した記録」として「これ以上でも以下でもない見事な一線」を画していると評価する[105]。板垣や今らの評価に見られるように岸田のルポルタージュは、戦場を追体験させる火野のテキストとは対照的な形で「文学者」としてのルポルタージュの理想を示していた。しかしそれは、プロパガンダの機能を逸脱し国家への批判に及びかねないものだった。

## おわりに

文学者の社会的役割を充足させるために、もはや大衆との関わりは不可欠であった。しかし大衆的関心におもねる作品作りは、文学者としての自負に足る作品の文学性を損なうものとされた。大衆性と文学性を架橋できない人々にとって、「事変」は文学者による国家貢献を示す一つの好機であった。文学者としての「事変」に対する透徹したまなざしと理解、文学者としての洗練された文章術を発揮する機会であった。自身に対してもそして結果的に日本に対しても客観的に戦争を報告しようとした岸田のルポルタージュは、唯一と言っていい文学者的ルポルタージュの成果であった。

しかし職業的な文学者による「ルポルタージュ」という形式を通じた“文学的実践”は、多くの場合むしろルポルタージュの価値を貶めるものと見なされ、批判を受けることとなった。「従軍ペン部隊」は、結局『麦と兵隊』に並ぶほどの人気作品を生みだすことはなかった。ペン部隊の帰国以降、「時局物」は職業的文学者の手を離れていった。火野は1938年11月に『土と兵隊』、12月から翌年6月にかけて『花と兵隊』を発表する。他に、上海・呉淞クリークの戦闘に参加した日比野史朗の『呉淞クリーク』や上等兵であった棟田博の『分隊長の日記』など、実際に「兵隊さん」として前線に立つ者の手になるテキストが人気を博し、ルポルタージュは文芸雑誌のテーマから姿を消していった。「時局」のなかで求められたのは大局的に事態を検討する「報告者」ではなく、全身体感覚的に状況のただ中におかれた体験者であった。それゆえ「兵隊さん」が作家となることを阻むものはなく、同時に文学的達成を志向する「文学者」を必要とする理由はなかった。「文学性」という観点の消失は「文学者」の意義をも喪失させたのである。

本稿では、岸田のルポルタージュ二作を通じた劇作家岸田の客観的姿勢の実践および同時代批評に注目した。これらの作品内で描かれた戦争像についても本稿では深く検討しなかった。1937年末と翌年8月との戦争の様相の変化が岸田にもたらした影響については、両ルポルタージュを比較しさらに読み解くことが求められる。また先行研究は従軍後の岸田の変節を指摘している。渡邊（1980）は『北支物情』ののちに発表した小説『暖流』で、自由主義的姿勢から保守主義・伝統主義への岸田の「転向」を指摘し、そこに従軍の影響を見て取る[106)]。二度の従軍は岸田に何をもたらしたのか。戦時下の岸田の歩みを正しく理解するためには1940年代の大政翼賛会文化部長としての活動までを射程にした通時的分析も必要となる。これらを今後の課題とし、いっそうの検討を進めたい。

〔付記〕本稿は科学研究費（基盤研究(B)「オラリティと社会」「言説を動かす情動とファシズムの変貌：テキストマイニングによる独伊仏日の資料分析」）の成果の一部である。

## 註

1 ）宮本（1937）、247頁。
2 ）宮本（1937）、247頁。
3 ）五味渕典嗣（2018）、松本和也（2018a）。
4 ）渡邊（1982）、148頁。
5 ）荒井（2007）、79頁。
6 ）松本（2015）、61頁。
7 ）河合（1933）、38頁。
8 ）山本（1935）、282頁。
9 ）小林（1937a）、57頁。
10）大阪毎日新聞社・東京毎日新聞社（1934）、269頁。
11）朝日新聞社（1932）、657頁。
12）板垣（1938）、28頁。
13）川端（1933a）、134頁。
14）横光（1935）、302頁。
15）山本（1936）、222–223頁。
16）1936年 3 月に発表した『風俗時評』の後は、大政翼賛会文化部長退任後の1943年に発表した『かへらじと』まで戯曲の創作は途絶える。
17）渡邊（1982）、83頁。
18）河上（1939）、251頁。
19）渡邊（1982）、90頁。
20）片岡（1935）、256頁。
21）山本（1936）、217頁。
22）内務省警保局（1937）、194頁。
23）内務省警保局（1937）、194頁。
24）岸田（1937）、157頁。
25）岸田（1937）、158頁。
26）岸田（1936）、35頁。
27）岸田（1936）、39頁。
28）岸田（1936）、42頁。
29）岸田（1936）、42頁。
30）岸田（1936）、39頁。
31）岸田（1936）、39頁。
32）『東京朝日新聞』1937年 7 月12日付朝刊、 2 頁。同盟通信社は、国の主導のもと日本電報通信社（電通）と新聞連合社（連合）の通信部門を合併し1935年に設立された。
33）時事通信社（1938）、438頁。
34）時事通信社（1938）、438頁。
35）東京書籍組合（1938）、 4 頁。
36）東京書籍組合（1938）、 4 頁。
37）内務省警保局（1938）、 3 頁。
38）板垣（1938）、44頁。
39）板垣（1938）、48頁。
40）板垣（1938）、48頁。
41）板垣（1938）、49–50頁。
42）宮本（1937）、249頁。
43）宮本（1937）、251頁。

44）小林（1937c）、249頁。
45）佐々木（1938）、58頁。
46）佐々木（1938）、59頁。
47）板垣直子（1938）、49頁。
48）板垣（1943）、34頁。
49）『文藝春秋』連載時は、第1回が「北支旅行前記」、第2回から第4回までの3回が「北支日本色」、第5回が「北京物情誌」という題であった。
50）岸田（1938a）、196頁。
51）岸田（1938a）、200頁。
52）近東（1938）、204頁。
53）板垣（1943）、41頁。
54）板垣（1941）、26頁。
55）岸田（1938a）、197頁。
56）岸田（1938a）、320頁。
57）岸田（1938a）、321頁。
58）岸田（1939b）、210–211頁。
59）岸田（1939b）、288頁。
60）岸田（1939b）、288頁。
61）岸田（1939b）、289頁。
62）岸田（1939b）、301頁。
63）岸田（1939b）、301頁。
64）座談会（1938）、166頁。
65）座談会（1938）、167頁。
66）座談会（1938）、169頁。
67）岸田（1939b）、336頁。
68）岸田（1939b）、323頁。
69）座談会（1938）、167–168頁。
70）座談会（1938）、177–178頁。
71）座談会（1938）、176頁。
72）東京書籍組合編（1939）、1頁。
73）東京書籍組合編（1939）、16–17頁。
74）板垣（1943）、46頁。
75）五味渕（2018）、54頁。
76）荒井（2007）、94頁。
77）窪川（1939）、585頁。
78）文部省社会教育局（1939）、31頁。
79）文部省社会教育局（1939）、32頁。
80）岸田（1939a）、100頁。
81）成田（2010）、156頁。
82）この懇談会に出席した作家は、菊池寛、久米正雄、吉川英治、白井喬二、横光利一、片岡鉄兵、尾崎士郎、佐藤春夫、小島政二郎、吉屋信子、北村小松、丹羽文雄の12名。このうち横光以外はペン部隊へ参加した。横光は北支部隊への従軍を希望し、別動隊が検討された。（『東京朝日新聞』1938年8月24日付朝刊、11頁）
83）都築（1980）、54–55頁。
84）参加者は以下の通りである。陸軍班には尾崎士郎、久米正雄、片岡鉄兵、丹羽文雄、白井喬二、川口松太郎、浅野晃、岸田國士、瀧井孝作、中谷孝雄、深田久弥、佐藤惣之助、富沢有為男、林芙美子が参加した。海軍班には菊池寛、小島政二郎、佐藤春夫、北村小松、吉川英治、吉屋信子、杉山平助、浜本浩が参

加した。
85）都築（1980）、62頁。
86）内務省警補局（1938）、44頁。
87）内務省警補局（1938）、44頁。『新日本』は文芸懇話会の後継団体「日本文化の会」の機関誌である。
88）板垣（1943）、26頁。
89）岸田（1939a）、72頁。
90）岸田（1939a）、72頁。
91）岸田（1939a）、85頁。
92）岸田（1939a）、80頁。
93）岸田（1938a）、321頁。
94）岸田（1939a）、82頁。
95）岸田（1939a）、84頁。
96）岸田（1938b）、56–57頁。
97）岸田（1939a）、200頁。
98）岸田（1939a）、200頁。
99）岸田（1939a）、200頁。
100）岸田（1939a）、頁。
101）岸田（1939b）、305頁。
102）阿部（1938）、 8 頁。
103）今（1939）、 7 頁。
104）今（1939）、 7 頁。
105）今（1939）、 7 頁。
106）渡邊（1982）、155頁。

## 参考文献

・引用箇所の出典は、著者名とその後ろにオリジナルの初版の出版年を記す。
・同一著者による同一年に出版された複数の文献は、西暦の後ろにアルファベットを付け区別する。
・引用中の旧字は新字に改めた。

朝日新聞社編（1932）『朝日年鑑 昭和 8 年版』。
阿部知二（1938）「岸田國士著「北支物情」」（『岸田國士全集』第23巻月報14号、岩波書店、1990年、 8 頁。）
荒井とみよ（2007）『中国戦線はどう描かれたか　従軍記を読む』岩波書店。
板垣直子（1938）『現代小説論』第一書房。
————（1941）『事変下の文学』第一書房。
————（1943）『現代日本の戦争文学』六興商会出版部。
大阪毎日新聞社・東京毎日新聞社共編（1934）『毎日年鑑』1934年版。
改造社（1935）『改造年鑑 1935年版』。
河上徹太郎（1939）『事実の世紀』創元社。
川端康成（1933a）「純文学の精神」（『川端康成全集』第31巻、新潮社、1982年、134–138頁。）
川端康成（1933b）「編集後記」『文学界』1933年10月号。
片岡貢（1935）「文芸懇話会の実体」『文芸』1935年10月号、254〜259頁。256頁。
岸田國士（1936）「日本に生れた以上は」（『岸田國士全集』第23巻、岩波書店、1990年、35–46頁。）
————（1937）「文化勲章に就て」（『岸田國士全集』第23巻、岩波書店、1990年、157–161頁。）
————（1938a）『北支物情』（『岸田國士全集』第23巻、岩波書店、1990年、196–342頁。）
————（1938b）「私の従軍報告」（『岸田國士全集』第24巻、岩波書店、1990年、56–68頁。）

————（1939a）『従軍五十日』（『岸田國士全集』第24巻、岩波書店、1990年、69–211頁。）
————（1939b）「支那人研究」（『岸田國士全集』第24巻、岩波書店、1990年、304–308頁。）
窪川鶴次郎（1939）『現代文学論』中央公論社。
小林秀雄（1937a）「戸坂潤氏へ」『小林秀雄全集 第5巻』新潮社、2002年、54–59頁。
————（1937b）「「日本的なもの」の問題Ⅰ」『小林秀雄全集 第5巻』新潮社、2002年、108–111頁。
————（1937c）「戦争について」『小林秀雄全集　第5巻』新潮社、2002年、248–255頁。
五味渕典嗣（2018）『プロパガンダの文学　日中戦争下の表現者たち』共和国。
近藤東（1938）「『北支物情』について」『新領土』1938年7月号。
今日出海（1939）「真の文化人の従軍記――「従軍五十日」」（『岸田國士全集』第24巻月報15号、岩波書店、1990年、7–8頁。）
佐々木草太郎（1938）「戦争文学としての従軍報告」『カレント・ヒストリー』 5月号。
座談会「支那を語る」『文学界』1938年1月号、165–179頁。
時事通信社（1938）『時事年鑑 昭和14年版』。
曾根博義（1990）「戦前・戦中の文学――昭和8年から敗戦まで」『昭和文学全集 別巻』小学館、325–400頁。
都築久義（1980）「戦時体制の文学者――ペン部隊を中心に」『愛知淑徳大学論集』第5号、49–74頁。
————（1988）「日本文学報国会への道――戦時下の文学運動」『愛知淑徳大学論集』第13号、95–106頁。
東京書籍組合編（1939）『出版年鑑 昭和19年度版』。
戸坂潤（1935）「「文学的自由主義」の特質――自由主義者の進歩性と反動性」（『日本イデオロギー論』岩波書店、1977年）。
内務省警補局（1937）『出版警察資料』第20号。
内務省警補局（1938）『出版警察資料』第31号。
成田龍一（2010）『増補〈歴史〉はいかに語られるか――1930年代「国民の物語」批判』筑摩書房。
松本和也（2015）「『北支物情』・『従軍五十日』の同時代評価――岸田國士の昭和一〇年代を考えるために」『立教大学日本文学』113号、50–63頁。
————（2018a）『日中戦争開戦後の文学場　報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会。
————（2018b）「岸田國士の大政翼賛会文化部長就任をめぐる言説」『立教大学日本文学』119号、80–93頁。
宮本百合子（1937）「明日の言葉――ルポルタージュの問題――」（新日本出版社『宮本百合子全集』第11巻、1980年、247–252頁）。
文部省社会教育局編（1939）『文部省推薦図書時報』第8号。
山本三生編（1935）『改造年鑑 1935年版』改造社。
山本三生編（1936）『改造年鑑 1936年版』改造社。
保昌正夫（1990）「大正文学から昭和文学へ――関東大震災から「文芸復興」まで」『昭和文学全集 別巻』小学館、261–324頁。
横光利一（1935）「純粋小説論」『改造』1935年4月号。
渡邊一民（1982）『岸田國士論』岩波書店。

キーワード：日中戦争、岸田國士、ルポルタージュ

**Synopsis**

## How to write a reportage: Kunio Kishida's two reportages

Takuya Nakagawa

The Second Sino-Japanese War began on July 7, 1937. Only after a month, famous writers had visited China to write reportages which told readers in Japan what the war was like. It was characteristic that not only journalists but also professional novelists wrote voluntarily reportages. This phenomenon was not attributed to national propaganda measures. The motive that writers would write reportages was mainly based on the literary problem which artistic writers had discussed from before the war, the relationship between Literature and the public.

The war was a good chance for writers to connect Literature with the public and get supported by the government. And the Japanese government backed up writers in order to use Literature for the propaganda campaign. In 1938 the special unit of writers named "Jugun-Pen-Butai" accompanied with the army to China. Reportages by writers got many critics that these reportages were too subjective and sentimental. Critics prized exceptionaly Kishida Kunio's two reportages. Kishida kept an objective viewpoint against Japan and analyzed the war as a literary person.

Since 1939 the soldiers began to write a war story instead of writers. The reportage boom ended just after the Jugun-Pen-Butai. The public needed not professional writers but soldiers as writer.

Keywords: The Second Sino-Japanese War, Kunio Kishida, Reportage